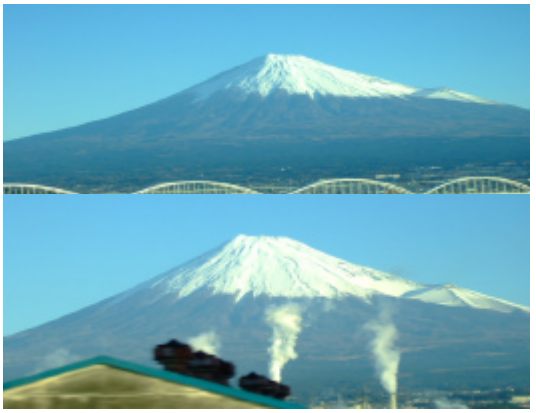
新しい年を迎えて

写真は昨年 12 月に東京へ行く途中、新幹線の車内から撮った富士山である。こんな美しい富士山も珍しいらしく、車内放送でも案内されたほどだ。正月というと、なぜか富士山を思い起こす。新しい年、2009 年を迎えたが、昨年はヘルペスで痛い目にあい、今年は歯痛による腫れた頬での新年となった。



ここ 2 年余り、日本ジャーナリスト会議の『ジャーナリスト』にマスコミ評を書いている。隔月で新聞各紙を論評しながら、政治や経済、社会問題についてコメントするもので、時間はかかるが自分なりに論点を整理するうえで役立っている。

昨年 12 月号に書いたが、このところの政治の劣化と迷走は目を覆いたくなるほどだ。そしてアメリカ発の金融危機から、「世界同時不況」へと経済状況は一変し、80 年前の 1929 年大恐慌のような事態である。ブッシュからオバマへの「チェンジ」も、ルーズベルト大統領の登場の頃を想起させる。

元日の各紙社説のタイトルは朝日「混迷の中で考える 人間主役に大きな絵を」、読売「危機に欠かせぬ機動的対応 政治の体制立て直しを」、日経「危機と政府 賢く時に大胆に、でも基本は市場信ぜよ」、毎日「日本版『緑のニューディール』を 環境の先導で成長を図れ」である。こうした社説タイトルにも時代が反映しているとともに、各紙のスタンスの違いが読み取れる。毎日は 09 年チェンジとして、オバマの「グリーン・ニューディール」と関連づけて論じており興味深い。それと朝日の次のような指摘は日本の厳しい現実を示している。

「バブル崩壊後の不況脱出をめざし、米国流の市場原理を重視した規制緩和が本格化してほぼ 10 年。小泉構造改革がそれを加速した。-----声高な自己責任論にあおられるように貧富の差が拡大し、働いてもまともな暮らしができないワーキングプワーが急速に広がった。労働市場の規制緩和で、非正規労働者が働く人の実に 3 割にまで膨れ上がり、年収 200 万円に満たない人が 1 千万人を超えてしまった。かつて日本社会の安定を支えた分厚い中間層はもはやない。」メディアは年末の厳しい寒さ中で途方に暮れるホームレス、それを支援するボランティアの活動を伝えている。 （2009 年 1 月 4 日　記）